



第7583号

2022年8月4日(木)

## 羽生結弦が発した言葉

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

### ◆「有言実行」のイメージ

言葉は自分を突き動かす原動力になるが、時に自身を追い込むこともある。この人の言葉を聞いた時に気に掛かっていた。2014年ソチ、18年平昌の冬季五輪の金メダリストで、実力・人気ともにフィギュアスケート界をけん引してきた羽生結弦選手。

先日の記者会見での「これからはプロのアスリートとしてスケートを続けることを決意した」という言葉には、「引退」ではなく、活躍のステージを変え、さらなる高みを目指してスタートを切る、という覚悟が感じられ、彼らしい言葉だと感じた。

「有言実行」の人というイメージがある。東日本大震災で被災した故郷・宮城県に希望と勇気をもたらす使命を自らに課し、次々に金字塔を打ち立てるたびに、地元で応援してくれる人をはじめ、世界中のファンや自分を支えてくれる人への感謝の言葉を常に口にしていた。

男子フィギュアの歴史を塗り変えていく活躍の一方で、けがや故障にたびたび悩まされてきた。平昌五輪では右足首の故障を乗り越え、2大会連続の金メダルに輝き、23歳で個人としては最年少で国民栄誉賞も受賞したが、満身創痍(そうい)で臨んだ北京五輪では、こだわり続けてきたクワッドアクセル(4回転半ジャンプ)が決められず4位。これが最後の競技となった。

### ◆「自分で自分を追い込んだ」

彼が発する言葉は、常に注目されてきた。「絶対王者だと自分に言い聞かせた」「自分で自分を追い込んだ。重圧と戦った」「誰からも追従されないような羽生結弦になりたい」「モチベーションは4回転半成功だけ」「負けは死と同然」—など、負けん気の強さと責任感から来るのか、力強いいちずな言葉がメディアをにぎわしてきた。

が、いつの頃からか、どこか痛々しさを感じていた。その言葉が彼自身を追い込んではいないか、そこまで背負わなくても良いのではないのか、と。

特に4回転半に固執する言動を見るにつけ、けがをするリスクも大きく、成功する確率が高くない大技は回避して、金メダルでなくても完成度の高い演技を見せてほしいと思った。

### ◆少年時代からの夢

迎えた北京五輪。フリーに先立つショートプログラムでの失敗を振り返って「氷に嫌われちゃったかな」とのコメントは意外だった。失敗があっても、淡々とその原因も修正の仕方も分かっているというコメントをしてきたのが羽生選手だったが、このときはどうにもコントロールできない状態であったのだろう。フリーが終わった後、「すべて出し切った。報われない努力だったかもしれないけど」と声を震わせた姿に、「もう荷物を降ろして楽になってほしい」と思わないではいられなかった。

だが、今回の会見報道の中で「4回転半は少年時代からの夢」と知り、メダルではなく、夢を追っていたのだと合点がいった。スケートが楽しくて、新しい技を覚えては次の技に挑戦してきた少年の頃からの夢が「4回転半ジャンプを飛ぶこと」。だから、リスクを冒しても追い続けてきたし、プロになっても「アスリート」だから挑戦し続けるのだ。大リーグで活躍する大谷翔平選手とは同学年の27歳。プロとしての羽生結弦さんにはスケート少年の気持ちに戻って、伸び伸びと挑戦を続け、スケートの神様に愛される姿をこれからも見せてほしい。  
(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003